

令和 4 年度
成田市中学生折り鶴平和使節団派遣事業
長崎訪問報告書



成 田 市

成田市平和啓発推進協議会

<< 目 次 >>

事業概要	1
活動内容	3
長崎訪問	7
訪問後の活動	
報告会	17
団員報告書	22
令和 4 年長崎平和祈念式典における平和宣言	34
平和都市宣言（世界連邦平和都市宣言、非核平和都市宣言）	36
平和記念碑	37



○事業概要

【事業名】

成田市中学生折り鶴平和使節団派遣事業

【目的】

市では、昭和 33 年に「世界連邦平和都市」を宣言するとともに、戦後 50 年目を迎えた平成 7 年には、「非核平和都市」を宣言するなど、平和啓発活動を進めている。戦後 80 年近くが経過し、戦争を体験した方が年々少なくなる中、その貴重な体験を風化させることなく、次世代に引き継ぎ、平和の大切さを伝えていくことが課題となっていることから、市内の中学生が被爆地を訪問し、直接、戦争の恐ろしさや平和の尊さなどを学び、その感想や成果を多くの市民に伝えることで平和啓発を促進させるものである。

【訪問先】

原子爆弾の被爆地であり、原爆資料館のある広島市・長崎市のうち、本年度は長崎市を訪問するものとする。

【日程】

令和 4 年 8 月 3 日（水）～8 月 5 日（金）

【使節団の編成】

- (1) 団 員…市内の公私立中学校（11 校）から 1 名ずつ推薦された 11 名とする。
- (2) 随行員…市教育委員会教育指導課職員 1 名、平和啓発推進協議会員 1 名、市文化国際課職員 1 名の合計 3 名とする。

【団員の責務】

団員は、本事業に関連する行事をはじめ、事前・事後研修会に出席するとともに、被爆地訪問において被爆者からの体験講話を聞き、被爆遺構や被爆関係資料館等の見学などを通じて、戦争の恐ろしさや平和の尊さなどを学び、訪問後に感想文等を市に提出しなければならない。

また、被爆地訪問の成果を学校内や市の行事等で発表することにより、多くの市民に平和の尊さを啓発するものとする。

【実施経過】令和4年

5月27日（金）	各中学校へ団員の推薦依頼
7月3日（日）	結団式・第1回事前研修
7月22日（金）	第2回事前研修
7月29日（金）	出発式、第3回事前研修
8月3日（水）～5日（金）	長崎市を訪問
8月18日（木）	事後研修、報告会
8月～11月	各学校での報告会

【使節団】

令和4年度成田市中学生折り鶴平和使節団の構成は次の通りです。

○ 中学生

学 校 名	学 年	氏 名	備 考
成田中学校	2年	立石 結衣	
遠山中学校	2年	小堀 朋華	
久住中学校	2年	石井 栞菜	
西中学校	2年	草野 ひなた	
中台中学校	2年	渡邊 あすか	団長
吾妻中学校	2年	高橋 星七	副団長
玉造中学校	2年	栗野 真璃	副団長
公津の杜中学校	2年	島田 真帆	
下総みどり学園	8年	櫻井 希羽	
大栄みらい学園	8年	向後 怜	
成田高等学校附属中学校	2年	遠山 結菜	

○ 随行者

成田市教育委員会教育指導課	成毛 典子
成田市文化国際課	齊藤 衣純
成田市平和啓発推進協議会	飯田 和宏

○活動内容

【成田市中学生折り鶴平和使節団結団式】

7月3日（日）、成田市中学生折り鶴平和使節団結団式を実施しました。



【事前研修】

原爆についての学習や被爆体験者のお話を通して、知識を深め、被爆地訪問に向けて準備しました。

第1回 7月3日（日）事業の概要、原爆とは、被爆体験講話（木村美子さん）

木村さんのお話は、原爆の被害、恐ろしさを知ることができるお話でした。特に、「まち中が火葬場」という言葉が印象に残っています。原爆はたくさんの命を一瞬にして奪うことができるという事実を知り、今後、被爆地を絶対に増やしたくないと思いました。（向後怜）

第2回 7月22日（金）戦争と平和について考える、千羽鶴の標語作り、見学先調べ

みんなで戦争、平和について話し合い、意見を共有することで自分の考えを深めることができました。他の人の意見を聞き、平和は今の自分たちの生活のことだと分かり、この先も今の生活を続けていけるようにしたいと思いました。（向後怜）

第3回 7月29日（金）出発式リハーサル、見学先発表



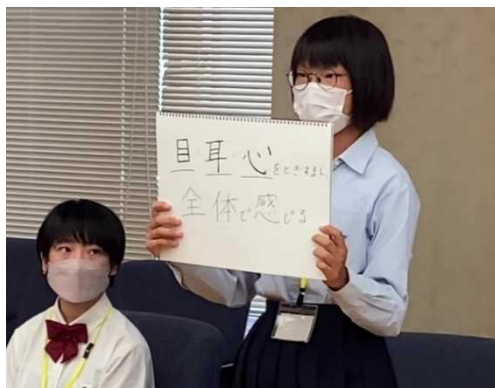
【千羽鶴収束作業】

市内 11 中学校の全生徒が平和への祈りを込めて折った鶴がボランティアの方々によって千羽鶴に収束されました。成田市平和啓発推進協議会から寄せられた折り鶴と合わせて、約 8,000 羽が被爆地に届けられ、この 13 年間で被爆地に献納した折り鶴は 1,462,850 羽になりました。

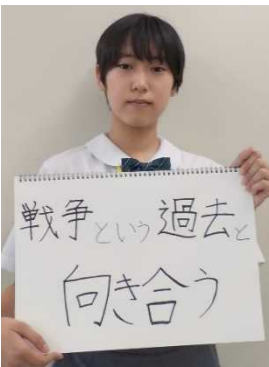
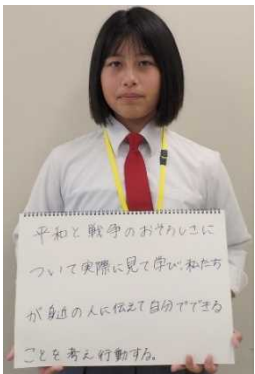


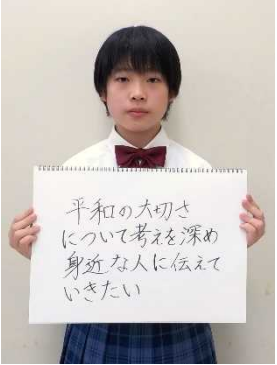
【折り鶴平和使節団・千羽鶴出発式】7月29日（金）庁議室

市内中学校の生徒らが平和への祈りを込めて折った鶴がヤマト運輸株式会社の協力により被爆地である広島と長崎に送られました。また、各団員が、成田市長、成田市議会議長の前で、長崎で学びたいことや体験したいことなどの抱負を述べました。



<長崎訪問に向けた抱負>

	
戦争を <u>学んで</u> <u>知って</u> 未来に伝える	被爆した方の考え方と自分の考え方を比較し、新たな考え方を身に付ける
	
戦争という過去と向き合う	戦争や原爆への<u>理解を深める</u>
	
平和と戦争のおそろしさについて実際に見て学び、 私たちが身近な人に伝えて自分でできることを考え行動する。	知る<u>きっかけ</u>になる

	
平和の大切さ どんなことでも広く、深く	目・耳・心をとぎすまし、 全体で感じる
	
平和の大切さについて考えを深め 身近な人に伝えていきたい	二度と戦争をおこさない

○長崎訪問

【行程】

- 8月3日（水） 京成成田駅 集合
羽田空港 発
長崎空港 着
昼食
平和出前講座聴講
長崎大学医学部見学
山王神社見学
救護所メモリアル見学
出島散策
ホテル 着・夕食
ミーティング
- 8月4日（木） ホテル 発
ボランティアガイドの案内で平和公園見学・千羽鶴献納・
長崎原爆資料館見学
昼食
被爆体験講話聴講
国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館見学
ボランティアガイドの案内で被爆遺構見学
（ 原爆落下中心地、浦上天主堂、
永井隆記念館・如己堂、山里小学校 ）
ホテル 着・夕食
ミーティング
- 8月5日（金） ホテル 発
オランダ坂、眼鏡橋散策
立山防空壕見学
長崎空港 発
羽田空港 着
成田市役所 着・解散

8月3日（水）

5 : 30

京成成田駅集合

駅にて出発の挨拶を終えた後、電車で羽田空港に向け出発。



5 : 54～

京成成田駅～羽田空港（日本航空 607 便）～長崎空港

11 : 55



13 : 00～

昼食（和泉屋 長崎平和公園前店）

14 : 00

14 : 25～

平和出前講座（平和ボランティア団体・Peace Caravan 隊）聴講

15 : 25



長崎平和出前講座では、長崎に落とされた原爆の威力を、長崎大学の Peace Caravan 隊の田川昌悠さんにお話し頂きました。日本は、唯一の被爆国で、何万もの死者、負傷者を出してしまいましたが、現在日本は、核の傘という、他国に攻撃を受けると同盟国の核に頼る立場にいるそうです。このことから私は、過去を知らせていくことも大事ですが、77 年経って何も変わっていない日本の現状も知らせていくことが大事だと思いました。（草野ひなた）

16 : 00～

16 : 25

長崎大学医学部見学



長崎大学医学部は、爆心地から約 600mのところにあり、門柱は爆風によって 10 度ほど傾いていました。また、長崎大学医学部はもともと医科大学だったことから、中には医学に関するものが色々な所に落ちていたと言っていました。中にいた人は建物の下敷きとなり亡くなった方や、火災に巻き込まれて亡くなった方も多くいました。このことから私は、爆風は思っていたより強力で恐ろしく、爆風のもととなっている原爆は、たった一発でたくさんの人を亡くしてしまう、とても恐ろしく、たくさんの人を苦しめるものだと思います。これからは、学んだことを身の周りの方に伝えることや、募金をすることなど、私ができる事を考え、一步一步進んでいきたいです。(小堀朋華)

16 : 30～

16 : 50

山王神社見学



山王神社は爆心地から約 900m 離れたところにあり、今回は被爆した二の鳥居と 2 本のクスノキを見てきました。二の鳥居は左半分を爆風で吹き飛ばされながらも右半分が奇跡的に残っており、またクスノキは、一時は枯れ木のようになったものの、2 年ほどで新芽が現れ、現在は樹齢 500～600 年の大木になっていました。実際に自分の目で見たことで、この 2 つの奇跡が生き残った人々を支え続けているのかもしれないと思いました。(栗野真璃)

17 : 30～

17 : 50

救護所メモリアル見学



救護所メモリアルは、被爆した人たちを治療した医師、看護師、また、その患者たちの手記や証言が展示されていました。私が一番印象に残っているのは、1人の看護師さんが証言した、ある2人の兄妹のことです。原爆ではぐれてしまった妹を、兄は救護所を何軒もまわりようやく見つけます。しかし、妹が横になったままブリのように飛び跳ねている姿を見て兄は崩れ落ちてしまいました。「もし自分がこうなってしまったら…」を簡単に想像することができる施設でした。これ以上戦争の被害者を出さないために、常にシミュレーションすることが大切だと思いました。(石井葉菜)

18 : 00～

19 : 30

バスでホテルへ移動～夕食（ホテル内レストラン）

19 : 30～

20 : 55

出島散策



21 : 00

ホテル帰着

徒歩でホテルに戻り、本日の反省と翌日の千羽鶴献納の準備をしました。



8月4日（木）

7:50

朝食後、路面電車で平和公園へ移動



8:50～

平和公園見学

10:00

2グループに分かれ、ボランティアガイドとともに公園内を見学し、千羽鶴を献納しました。



平和公園は、悲慘な戦争を二度と繰り返さないという誓いと世界平和の願いを込めて整備された公園です。ここには、水をくださいと言いながら亡くなった人の冥福を祈る「平和の泉」、原爆の恐ろしさや平和を祈る「平和祈念像」、各国から贈られたモニュメントがありました。特に心に残ったのは「平和の泉」で、平和の象徴「ハト」の羽ばたきをかたどったデザインでした。原爆落下中心地では私たちが折った鶴を納めました。ここには浦上天主堂という建物の一部があり、少し傾いていて、爆風の恐ろしさを知ることができました。熱線などの被害もあったそうです。絶対に戦争を起してはいけなと、再確認することができました。（渡邊あすか）

10 : 00～

11 : 30

長崎原爆資料館見学

ボランティアガイドとともに資料館内を見学しました。



長崎原爆資料館は、原爆や戦争、核兵器などに関する多数の資料が展示されている施設です。私はその中で、亡くなった弟を背負う男の子の写真が印象に残りました。写真の男の子は、自身も被爆しながら、歯を食いしばって、亡くなった弟を燃やす順番待ちをしていました。私は、その男の子の、どんなに悲しくても歯から血が出るほどこらえている姿に驚きました。そして大切なものを一瞬にして奪う原爆は、悲惨なものだと強く感じました。(島田真帆)

11 : 30～

12 : 30

昼食 (ホテル セントポール長崎内レストラン アザレア)

13 : 00～

14 : 20

被爆体験講話聴講

被爆体験者・丸田和男さん：長崎県立瓊浦中学 1 年生だった 13 歳の時、爆心地から 1.3 km 離れた自宅で被爆。



丸田さんはガラスの破片が刺さるなど重傷を負い、その後も放射線の後遺症に苦しみました。その時の心情、当時の情景を聞き、戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさを改めて気付かされました。実際に体験した人の話を聞くと、いう貴重な体験を決して無駄にせず、講話を聞いて学んだこと、感じたことを多くの人に伝えていきたいと思いました。(櫻井希羽)

14 : 20～

14 : 45

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館見学



追悼平和祈念館では体験記や証言を音声で聞くことができたのですが、時間がなくまわることはできませんでした。しかし、遺影、追悼、祈念スペースを見学しました。遺影の中には笑顔の方もいました。たった一発の原爆で何万人もの命と輝かしい笑顔が失われてしまったのだと、それだけでも考えることがたくさんあるほど心を動かされました。(草野ひなた)

15 : 00～

17 : 00

2 グループに分かれて被爆遺構等を見学

原爆落下中心地



浦上天主堂



浦上天主堂は、大正 14（1925）年に 30 年の歳月をかけて建てられ、完成した当時は東洋一といわれたほど大きく立派な大聖堂でしたが、爆心地から約 500m の場所にあったため、爆風により建物は倒壊してしまいました。今は、再建されてしまっているため、建物から被害の大きさを見ることはできませんでしたが、石像などは見ることができました。被害を受けた聖マリア像と聖ヨハネ像はとても悲しい顔をしていました。また、落下した鐘楼の大きさを見て驚きました。とても大きなものさえ簡単に吹き飛ばす威力があった原爆。戦争や核兵器はもう二度と使われてほしくないと思いました。(遠山結菜)

17 : 30 ~

19 : 00

19 : 20 ~

20 : 10

永井隆記念館・如己堂



永井隆さんは放射線の研究をしていました。原爆投下後、自身も被爆しているにも関わらず、救援活動にあたりました。のちに白血病の療養をしていたのが如己堂という建物です。名前の由来として、「己の如く人を愛せよ」という言葉からつけられたそうです。この建物の広さは二畳一間で、この広さを3人で暮らしていたそうです。実際に現地へ行って見て、被爆しているにも関わらず救援活動をしていたという永井さんの執念や、如己堂に込めた強い思いを感じとれたので、良かったです。(高橋星七)

山里小学校



山里小学校は爆心地から約700mの位置にある小学校です。ここでは防空壕や「あの子らの碑」などを見ることができました。「あの子らの碑」や「あの子」という歌の歌詞から平和を想う気持ちや、戦争の怖さを感じることができ、今ある平和の大切さについて理解することができました。そこから私は、戦争をもう二度と起こさないよう、平和を守っていきたく強く思いました。(立石結衣)

路面電車でホテルへ移動～夕食（ホテル内レストラン）

大浦天主堂ライトアップ見学



20 : 45

ホテル帰着

徒歩でホテルに戻り、本日の反省と最終日に向けた確認と意気込みの発表を行いました。



8月5日（金）

8 : 00

ホテル出発

8 : 00～

（徒歩移動）オランダ坂散策～（バス移動）～眼鏡橋散策

9 : 30



9 : 30～
10 : 00

立山防空壕見学



立山防空壕は爆心地から約 2,700m 地点にあり、原爆投下前には警備・救援・救護などの指揮や会議を行っていました。原爆投下時には爆風で扉がこわれてしまいましたが、ここから国の防空本部に連絡を取り救援要請を行いました。現在は中の柱が木でできている仕切り壁や当時使われていた通信機器などが展示されています。私はこの立山防空壕を訪れたことで、戦争時の資材不足や、原爆の被害は広範囲に広がっていたことを知ることができました。(栗野真璃)

13 : 30～
18 : 29

長崎空港（全日空 666 便・機内で昼食）～羽田空港～京成成田駅

18 : 45

成田市役所 着・解散



【事後研修】

事後研修では、各団員が長崎訪問中に「見て、触れて、感じた」ことをまとめ、平和の尊さを伝える「長崎訪問報告会」に向けた準備に取り組みました。

8月18日（木） 報告会準備、アンケート

○報告会

【長崎訪問報告会】8月18日（木）庁議室

報告会では、3日間の訪問で「見て、触れて、感じた」ことと、その体験を今後どのように生かしていきたいかを発表しました。最後に、教育長から講評をいただきました。



＜長崎で感じた「自分の想い」～私にできること～・平和とは何か＞



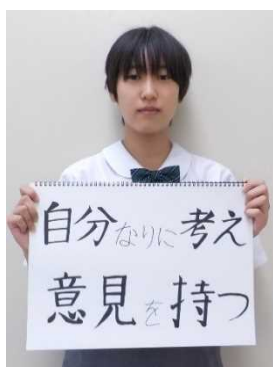
平和への願いをつなぐ

長崎では実際に戦争を体験した方の話を聞いたり、映像などで体験したことを見たりしました。どの方も戦争をしてはいけないと最後に語っていたのが記憶に残っています。長崎で学んだ平和への願いをたくさんの人に伝えていきたいと思いました。



自ら行動しなければ平和は訪れない

自分の考えを伝えていくことは大切ですが、一番大切なのは、「伝えた後」だと思います。人任せに行動するのか、自ら行動して思いを発信するのか。僕は自ら行動して思いを伝えることの方が、世界平和に向けて一歩前進するのではないかと考えます。



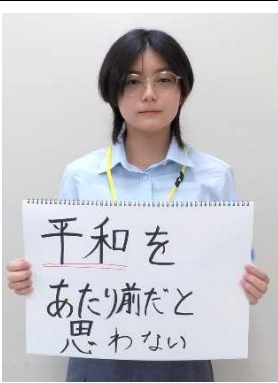
自分なりに考え意見を持つ

戦争や原爆には答えがないからこそ、自分の中でどうして原爆は落とされたのか、これからをどのように変えていくかななどを深く、色々な視点から考えていきたいと思っています。



うけつぎ伝える

長崎訪問や事前研修で平和や原爆について沢山学び、これからのについて自分の考えを深めることができました。長崎を訪問したことで、平和の大切さを改めて感じ、今ある当たり前の大切さに気付くことができました。今回教えてもらったこと、伝えてもらったことを今度は自分が引き継ぎ、自分の考えと共に一人でも多くの人に伝えていくことが、平和を守っていくために、今私ができることだと思います。

	
<u>伝える</u> <u>理解</u>してもら<u>う</u> <u>考</u>えてもら<u>う</u> 今回学んできたことを多くの人に伝え、少しでも戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさ、平和とは何か、核を少しでも減らすためにできることを考え、理解してもらいたいです。私は将来医者になりたいので、今も原爆の放射線などで苦しんでいる人を1人でも救えるようになりたいと思いました。	<u>受け継いで</u><u>伝える</u> 長崎に行き、被爆した人が少なくなっていることを改めて感じました。私たち一人一人がそれを意識しなければいけません。聞いたこと、見たこと、感じたこと、学んだこと、小さなことでも後世に伝えて残さなければいけないと、強く思うようになりました。どれだけ悲惨で人々が苦しんだとしても、それを伝える人がいなくなってしまっっては段々風化していきます。もう二度と同じことを繰り返さないように、伝えることをやめてはいけないと学びました。
	
<u>平和</u>をあたり前だと思わない 戦争当時の状況では、ご飯を食べられることや日常生活を送れることでも平和だと感じたことが多いと聞きました。ここから、苦しい状況を経験している人ほど小さなことでも平和だと考えられるのではないかと考えました。今では、小さな平和はあたり前だと思う人は少ないと思います。しかし私は、当時の状況を知ったからこそ、すべてがあたり前だと思わずに、今ある平和に感謝していきたいです。	<u>平和の尊さ</u>を伝える 原爆資料館や丸田さんの話で、中学生は学徒動員で勉強もできず、食料もなく夏休みもないと知りました。しかも、原爆で大切なものを奪われました。私は信じられませんでした。あるのが「あたり前」だからです。私たちは今、平和があるからこそあたり前のことができると思い知らされました。77年前の出来事を忘れず、二度と悲惨な戦争を起こさないためにも、長崎で学んだ今ある平和の尊さを伝え、より多くの人に知ってほしいです。



過去を知り 平和をつくる

現地で戦争や原爆の恐ろしさを肌で感じ、改めて二度と起こしてはいけないことだと強く思いました。今、世界でもロシアとウクライナが戦争を起こしていますが、争いが起こるのは戦争・原爆がどれほど恐ろしいものなのかを実感して分かる人が少ないからだと思います。私は、原爆により亡くなった方の思いや被害を多くの人に伝え、戦争に反対し自ら行動しなければいけないと思いました。

平和は今の私たちの生活

平和は今の私たちの生活のことだというのは、事前研修で、みんなで平和について考えた時に私が感じたことです。「平和とは何か」という問いに対して出た意見は、「学校に行けること」「おいしいものを食べられること」などでした。今の私たちが当たり前にやっていることが「できること」が平和だという意見が一番多かったので、私は今の生活が平和だと思いました。私はこの「今の生活」を続けるために、戦争の恐ろしさを少しでも多くの人に伝え、今の生活が大切なものだと感じてもらいたいです。



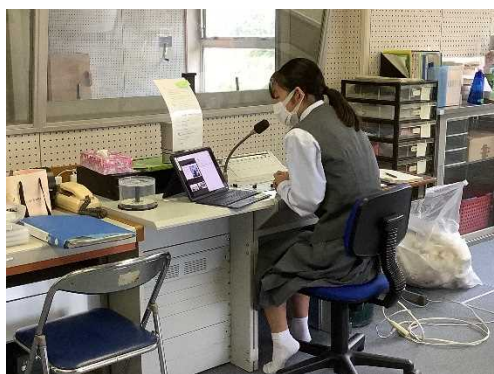
私にとっての平和は

核兵器・戦争がなく誰もが**笑顔**でいられる世界
事前研修会の時、「あなたにとっての平和ってなんですか」と聞かれてうまく答えられませんでした。しかし、長崎に行って自分の目で見て話を聞いて分かった気がしました。核兵器は、一瞬で世界を地獄にし、形をがんや白血病などに変えて、何年経っても人々の心を苦しめています。この怖さや平和の大切さ、命のありがたみを周りの人などに大切に語り継いでいこうと思いました。

【学校報告会】

派遣団員となった生徒たちは、それぞれの中学校において、被爆地を訪問して学んだことを自分の言葉で先生や他の生徒たちへ報告しました。

成田中学校	10月17日（月）
遠山中学校	10月14日（金）
久住中学校	10月21日（金）
西中学校	10月17日（月）
中台中学校	11月14日（月）
吾妻中学校	10月14日（金）
玉造中学校	11月11日（金）
公津の杜中学校	9月26日（月）
下総みどり学園	10月29日（土）
成田高等学校附属中学校	8月26日（金）



【派遣団員の報告】

長崎派遣を終えた後、派遣を通して感じた事や平和への思いが派遣中学生それぞれの言葉で綴られています。

過去を知って未来を考える

中台中学校 2年 渡邊 あすか

戦争とはどんなものだろうか、「恐ろしい」「こわい」ものなのか、私には最初こわいぐらいのことしか考えることができませんでした。

私は8月3日から成田市中学生折り鶴平和使節団として長崎に行きました。77年前のここ長崎で原爆が落とされたと考えるととても鳥肌が立ちました。

まず、平和出前講座で Peace Caravan 隊の長崎大学の田川さんの話を聞きました。ここでは、長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」の威力や核兵器をめぐる三つの立場を教えていただきました。そして実際に戦時中に長崎大学で使われていた門を見ました。この門は原子爆弾による爆風で傾いたと聞きました。私はそこで爆風というのを初めて知って、さらに爆風の恐ろしさにも気付かされました。爆風の恐ろしさはほかにもありました。山王神社の鳥居は爆風で片方がほうかいし、もう片方が残っていました。救護所メモリアルでは目を奪われるような写真がたくさんありました。皮ふが焼け、パニック状態の人々を診察する医師や看護師、むしろの上で寝かされている被爆者など、どれも77年前に実際に撮られたものでした。そして当時、主治医や看護師として働いていた方々の映像を見ましたが、そこには「目がとびでたり、耳が切れたり痛いものを見た」「かみの毛もなく骨が見え男か女かもわからなかった」そんな言葉もありました。一人一人の言葉に重みを感じました。

2日目に私が感じたのは「伝える」ことです。2日目は平和案内人の話を聞きながら見学をしました。案内人は私たちに細かい所まで丁寧に教えてくださったので、インターネットで見てもわからなかった所や、初めて知ったこともたくさんありました。このように伝えてくださる人がいるからこそ、今、私たちは学びに来て理解できているんだなと思いました。原爆資料館では77年前に使われていたもの、亡くなってしまった人の骨がありました。特に私が一番おどろきを感じたのは、長崎に落とされた原爆「ファットマン」の実物大があったことです。想像よりも大きく、そしてとても恐ろしかったです。実際に長崎に落ち、たくさんの人の命を奪ったと考えると、私は、戦争はどれだけ恐ろしいものかを実感することができました。

次に、被爆体験講話を聞きました。お話ししてくださったのは丸田和男さんで、中学生で被爆したそうです。丸田さんは大きく四つの原爆被害にあったとおっしゃっていました。それは、「肉体的な被害・母親を亡くす・大切なものをなくす・友達を亡くす」の四つで、私はこの話を聞き、やっぱり平和は大切だと改めて思うことができました。そして丸田さ

んは「戦争はたくさんの命を落とす。二度とこんなことを起こしてはいけない。」と強く語っていました。

私はこの長崎派遣で身近なものを大切にしたいなと思いました。もし自分が戦時中の場所にいて原爆が落とされ、家族や友達、大切なものをなくしたら…自分は生きる気力もなくなっていくのか…こんなことを考えていると身近なものを大切にしないといけないという気持ちがわきました。また、まわりに伝えることも大切だと思いました。今回は私たちが見学に行き、いろいろな人のお話を聞きましたが、次は私たちが未来に伝える大事な役割をしないといけません。私たちが学んだことを伝えて平和な世の中にしていきたいと思いました。

「二度と戦争を起こさないように、過去を知って未来に伝える」

伝える為に「声」がある

吾妻中学校 2年 高橋 星七

僕たちは、核や戦争に関し、「核のない平和な世界」「戦争をなくそう」という意見は出ているが、それに見合った具体的な対策としての意見が出ていないのが現状だ。そして、僕たちは被爆者からすれば優雅に過ごしていると思われるもおかしくはないし、原爆や戦争について知る機会もなければ実感することもないまま一日を過ごしている。

しかし今回、成田市中学生折り鶴平和使節団に参加することになり、原爆や戦争について深く知る機会ができた。そしてそれを身近な人から伝えていき、広めていくという使命もできた。

実際に長崎へ行き、たくさんの資料を見たり、お話を伺ったりしたが、やはり被爆者の丸田さんのお話が頭から離れない。

丸田さんは当時 13 歳。僕たちと同じ中学生。高学年は武器をつくるため、学校にはほとんどおらず、勉強をする暇もなかったそうだ。

広島に原爆が落とされてからたったの 3 日。長崎市民はこの場所に原爆が落とされるなど思ってもみななかっただろう。その日は曇りで、空を見ても B29 (爆撃機) が見えなかった。けれども、B29 は急降下してきてファットマン (原子爆弾) を放った。爆風で建物が吹き飛び、熱線で体が丸こげになった。さらには放射線の影響もあり、白血病になったり、原爆症といわれる症状が出たそうだ。丸田さんは家の柱の下敷きになったがなんとか抜け出した。後に母が即死したことを耳にしたが、母の死を確かめるほどの気力も残っていなかったそうだ。

一度、当時の丸田さんの立場になって考えてみる。家族がいなくて、友達もいなくなり、辺りを見ると男女不明の死体が山ほどあり、自分は柱の下敷きになっていて、もうすぐ死ぬかもしれない。こんなことを考えただけで、「もう少しでも生きたい」と思える。きっと皆さんも思わないはずもないだろう。そしてこの思いをした人が大勢いる。

最後に丸田さんは、「人間はなんて愚かなものなのか」とおっしゃった。考えてみればそう
うだ。同じ人同士で殺し合い続けている。今も尚だ。「正しい戦争」など一つもないし、「得
がある戦争」なんてものもない。丸田さんがおっしゃったことはとても深く、勉強になっ
た。そして丸田さんは、

「人は愚かなままであってはいけない！」

と強くおっしゃった。

「人は愚かなものばかりではない。そしてそのものたちが変えなければならない」

というお話を聞き、なんて力強い言葉なんだと思った。振り返ってみても、一つ一つの言
葉に対しての重みが強かった。実際に原爆を体験した方だからこそ感じたことなのだと思
う。僕たちはこのような特別な経験をしたからこそ、このことを広めていかなければなら
ない責任を改めてもつようになった。

今、僕たちがいる場所に核が落とされるとしたら。

今、大切な人の命が一瞬で奪われるとしたら。

僕には何が出来るだろう。

あなたならどうしますか？

僕は世界平和実現のために、自ら声を出していきたい。

戦争と原爆を知りこれからをつくる

玉造中学校 2年 栗野 真璃

皆さんは原爆について考えたことがあったらうか。8月6日8時15分には広島、8月9
日11時2分には長崎に原子爆弾が落とされた。今では合わせて52万人以上の人がこの原
子爆弾で亡くなったことがわかっている。それから77年が経ち、私たちは今回「ナガサキ」
を訪れた。

そこでは三つ感じたことがある。

初めに感じたこと、それは思っていた以上に長崎は被害が大きかったということだ。原
爆の威力は広島と比べて、長崎の方が約2倍あったことは現地に行かなければ知らなかつ
たことだと思う。また、救護所メモリアルでは、医療従事者の記憶や思いが壁に記されて
いた。その中でも佐々木みつゑさんという方は「生きながら腐敗現象を起こしかける人々
の肉の匂いが廊下まで放たれていた」という信じ難い事実をはっきりと記していた。その
下の注釈には戦争により救護物資が足りていなかったことが書かれていた。私自身このこ
とには大きなショックを受けた。物資さえあれば腐敗をせずに済んだ人がいたかもしれな
い、もっと多くの人々が助かったかもしれない。当時の人はこのことが分かっても、どうし
ようもすることができなかったと考えると胸がきつく締め付けられた。

二つ目に感じたことは失われたものは二度と戻らないということだ。被爆者である丸田
和男さんは中学1年生の時に被爆し、放射線によってガンには2度かかったという。辛い

体験であったとも話していたが、それを我慢してでも次の世代へ伝えていかなければならないと考えたのが被爆体験講話を始めた理由の一つでもあるそうだ。もう一つの理由は原爆後、当時 300 人いた同級生のうち亡くなった 114 人のためだ。生き残った自分が伝えていかなくてはならないとも語っていた。亡くなるということはもう二度と会えなくなるということで、絶対に戻らない。それを別れもなしに一発で引き起こすことができってしまう原爆がとても私には憎く感じられた。

三つ目に感じたことは今ある平和の尊さだ。色々な資料を見たり話を聞いたりする中で、「もう二度と戦争を起こさない、核兵器を廃絶したい」という強い思いが伝わってきた。現在の日本では戦争は起きていないし、食べ物もスーパーなどで買うことができる。その前提には戦後に変えようと行動を起こした人々がいたからではないだろうか。また、この思いがまだ戦争を続けるというものであったら、世の中は悪い方向へと向いていたということだ。だからこの平和は当たり前ではなく、努力のもとに築かれたのだと思う。

まとめとして、私は「ナガサキ」を見て考えることで原爆によって失われたものは大きく、しかしそこから得たものも大きいと思った。戦争を学ぶということは被爆者の思いを受け継ぐと同時に私たちのこれからをつくっていくのだろう。そして私たちの先祖たちが行動を起こしたように、核兵器廃絶に向けて動くことが私たちが受け継いだ使命なのだと感じた。

最後になるが、過去はもう変えられない。しかし、これから起こることは私たち次第ではどんな方向にも動いていく。77 年前に起こったことが忘れ去られてまた同じことが起きてはいけない。だからまずは、戦争を知ろうとする心をもつことが平和学習の一步としては大切なのだとこの長崎派遣を通じて心からそう思った。

受け継ぎ伝える

成田中学校 2 年 立石 結衣

「戦争」はよくないもの、怖いもの、という漠然としたイメージは前からもっていたものの、そこまで詳しく知る機会や学ぶ機会はなくそれだけのイメージで終わっていました。しかし、今回中学生折り鶴平和使節団として 3 日間長崎に訪問したことで、戦争や平和について学び考えることができました。

1 日目は平和出前講座を受けた後、山王神社の一本柱鳥居や長崎大学医学部の旧正門を見に行きました。講座で原爆について教えていただいたから見学したことで、威力の大きさをより感じられ、講座だけではわからなかった怖さも感じることができました。傾いた門、倒れた鳥居、原爆によりできた傷を目の当たりにすることで原爆の恐ろしさを改めて実感することができました。

2 日目は原爆資料館に行きました。そこで私が感じたことは、「怖い」でした。平和をこわしてしまう戦争が、これほどの威力をもつ原爆が怖い。そう感じました。原爆投下後の

様子は映像や写真で見ただけでも目を背けたくなるようなものばかりでした。実際に目に
してなくても怖いと感じるものであるのに、実際に体験した人、目の当たりにした人はど
れほど怖かったんだろうかと思いました。

色々見た中でも、一番覚えているものは、「焼き場に立つ少年」という写真です。ガイド
の方に、亡くなった弟を背負い、火葬の順番を待っているのだと、説明してもらいました。
ギュッと唇を噛みしめて、なんとも言えない表情で立っている姿。もし自分が彼だったら
彼みたいに気持ちを押し殺して見ていられるだろうか。自分だったらこんな状況に耐えて
これから先も生きていけるだろうか。と、色々なことを考えさせられました。亡くなった
家族が火葬される順番を待たなければいけない、家族が火葬されるのを見ていなければい
けない、そんな彼の気持ちを想像すると見ていてとても苦しく胸が痛くなるようなもので
した。

その後、被爆を体験した方からお話を聞きました。当時のことを「この世の地獄」とい
う表現をされていて、その状況がどれだけ悲惨なものだったのかを感じることができまし
た。被爆された時は私と同じ中学生のときだったと聞き、もし自分だったらと思うととて
も恐ろしく、戦争に不安と恐怖を感じました。

私は研修も含め計 2 回、被爆した方からお話を聞きました。それぞれ違う体験談で聞い
て感じることは少しちがいましたが、2 人の話に共通することがありました。それは「戦争
は悲惨なもの」ということと「最後の被爆地に」という想いです。お話の中の平和を強く
願う想いがとても印象に残っています。戦争は二度とおこしてはいけない、元々そういっ
た認識はしていましたが、実際に体験した方のお話を聞いたことでより強くそう思うよ
うになりました。

資料館を見学したり、お話を聞いたりしたことで、戦争は多くの方が犠牲になった肉
体的にも精神的にも大きな傷を残したもので、その瞬間だけでなく長きに渡り人を苦しめる
もの、ということを学びました。

今、日本では戦争がおきていないため無縁に思えるかもしれませんが、しかし、戦争は身
近な国でもおきていて、いつながおきるかなんてわかりません。平和は誰か 1 人の力
では守れないからこそ、この機会に一人一人がもう一度、平和について考える必要がある
と思います。これから先の平和を守っていくためには、誰かがやってくれる、自分は関係な
い、ではなくその内の 1 人だということを自覚すること。そして一人一人がもっと戦争や
平和について理解し考え、それを一人でも多くの人に伝えていくことが、大切だと考えま
す。

私はこの 3 日間で平和の大切さを学び、今ある当たり前の大切さに気がつきました。今
回の長崎訪問で見たり聞いたりした貴重な体験、伝えてもらった平和の大切さ、そこから
考えた自分なりの平和に対する考えや想い。それを今度は自分が受け継ぎ、伝え、広めて
いきたいと思いました。この 3 日間での経験が無駄にならないよう、伝え広めるという行
動ができるようにしていきたいです。

「命の尊さ」

遠山中学校 2年 小堀 朋華

私は成田市中学生折り鶴平和使節団として、8月3日から8月5日まで長崎を訪問しました。

長崎に行き一番私がおどろいたのが平和公園・被爆地です。77年前今日の天気のように暑い日、長崎にファットマンという原爆が落とされました。町中には、皮ふが焼けている人、崩れた家の下敷きになっている人、手足が吹き飛んでいる人、目がとび出ている人たちが倒れていました。火葬場もなくなり市内は鼻をつまむほどの匂いに包まれていたそうです。77年前に投下された当時は約73,900人の命が、今年8月現在では約189,000人の命が犠牲となっています。そして、後遺症で毎年多くの方が亡くなっています。救護所メモリアルという所で、被爆当時看護師として勤めていた方の映像が流れ、その方は「今の人たちには絶対わかりません」と言っていました。そこで、戦争は私たちが体験していないからこそ学ぶこともあるし、語りつがなければならないと考えました。

一番印象に残っている平和公園で、最初に目に入ったのが噴水「平和の泉」です。その平和の泉には二つの意味があります。一つ目は、ハトを表しています。そして、ハトとは平和のシンボルなので二つ目は平和を表しているそうです。平和の泉の前に、当時小学4年生の女の子が書いた詩が彫られていました。「のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました」とありました。そこで私は、水を飲めること、家に帰れること、親に会えること、友達と遊べること、勉強できること、全てが幸せ・平和だと感じました。なんで勉強できることが幸せ？と思う人もいるかもしれません。ですが戦争時は勉強すらできなくてずっと兵隊として働くか若い人たちは列車の運転手として働くしかなかったのです。なので私は勉強できる事も幸せだととらえました。

次に見たのが平和祈念像です。案内人の方によると、平和祈念像はそれぞれの手足で意味が異なるそうです。右手は人差し指を立ててあげていて、そこには原爆の恐怖・恐ろしさを表しているそうです。左手は手の平を下にし横にあげています。これは、世界平和を意味しているそうです。そして右足はあぐらのように座っていてこれは日本の仏教の座禅を意味しているそうです。最後に左足、左足は立ち上がる寸前の形をしているように見えます。これは復興・復旧を表しているそうです。このように、それぞれの手足によって意味が異なります。ですが、共通しているワードが一つあり、それは“平和”ということです。この像を作った北村西望さんは、なぜこのような像を作ったのでしょうか。私は、この像で平和について、戦争の悲惨さについて感じてほしいから作ったと思いました。

現在でも核を持っている国はあります。持つ事は私たちには止められません。ですが私たちが原爆の恐ろしさについて広めるなどできる事を考え、一日一日を過ごせば何かは変わるはずです。私はこれから、核で苦しんでいる人の思いを無駄にせず、核の数を1万発以下にできることを考えて行動しようと思います。そして「平和とは何か」を考え、「平和

になるためには何をすればいいか」を考え行動しようと思います。その小さな考えが、ある人を救うきっかけにもなるかもしれません。最後に、戦争・原爆の恐ろしさを身近な人たちに伝え、核を少しでも減らしていけるように活動していこうと思います。

平和への近づき方

久住中学校 2年 石井 葉菜

「戦争はいけないこと」「絶対に戦争を繰り返してはいけない」世界中の皆知っていることです。皆知ってて、皆わかってて、皆信じていることです。私もそう思って、この13年間生きてきました。その思いは今でも変わりません。長崎を訪問したことで、その思いはより強くなりました。

8月の3日に私たち成田市中学生折り鶴平和使節団は長崎を訪問しました。訪問期間は3日間。3日間で現地でしか体験できないことを、目、耳、頭を使って体験しました。1日目は、図書館内にある救護所メモリアルという施設などで被爆者の方々の手記や証言を見ることができました。どれも生々しくリアルで、思わず顔をゆがめてしまうようなものがたくさんありました。その中でも今でも思い出すだけで心臓のあたりが冷えていく、恐ろしい証言がありました。ある二人の兄妹を見た看護師さんの証言です。「妹とはぐれてしまったお兄ちゃんが、いくつもいくつも救護所を探して、やっと見つけたと思ったら、妹はあげられたぶりのように横になってはねていた。」という内容です。もし私が同じことになっていたとしたら。弟とはぐれて、生きてるか死んでいるかもわからない。それだけでも辛いのに、必死にさがしてようやく会えたと思ったら、変わり果てた弟が床でビチビチとはねている。考えただけで気持ちが悪くなってきます。お兄ちゃんが一人で探し歩いていたということは、お母さんもお父さんも動ける状態じゃないということです。そんな中でやっと見つけた身内がそのような状態。どんなに辛かったでしょう、どんなに苦しかったでしょう、どんなに悔しかったでしょう。私には体験したことがないので、簡単に想像することはできません。ただ、そんな状況でも、お兄ちゃんは生きなきゃいけなかったことは、証言でわかりました。

教科書で学ぶのと、実際に現地へ行って吸収するのとでは全然違いました。私は実際に戦争や被爆を経験した方々のように、争いの怖さや平和の尊さを上手に伝えることができないかもしれません。それでも、後世に戦争の醜さや恐ろしさを伝えたいという人たちの思いを受け継いで、より多くの人に伝えていくことはできます。平和とは、その逆を知っている人たちやその方々の思いを受け継ぐべき私たちが、伝えて伝えて、そこでやっと保たれるものなのだと思います。

2日目にお話をしてくれた丸田さんの言葉の中で忘れられないものがあります。「人間には愚かな人たちがしかいないのだろうか。」この後には、「そんなことはない、愚かではない人たちが訴えかければ、一部の愚かな人たちも気付くはずだ。」といった内容が続きます。

今、ロシアによるウクライナ侵攻が世界中で話題になっています。なぜ、罪のない人たちが、寒く狭いシェルターの中で心を冷やさなくてはいけないのでしょうか。なぜ才能がある人たちが、ロシア人だからという理由で、夢を諦めなくてはいけないのでしょうか。なぜウクライナの味方をする国々は、話し合いの場ではなく、武器を提供するのでしょうか。こんなにもたくさんの人たちが平和を訴えているのに。こんなにも多くの人たちが涙を流しているのに。なぜ愚かな人たちの耳には届かないのでしょうか。

私が長崎で学んだことで見つけた平和な世界をつくるための一番簡単な方法は、考えることです。「なんで…なのか。」「もし私が同じ目に合っていたとしたら。」考えて考えて、ここで出した自分の結論を多くの人と共有することでやっと、平和に近づくと思うのです。長崎で聞いて見て感じたことをできるだけ多くの人に伝えて、私がその人たちの平和について考えるきっかけになればいいなと思います。

地獄のような「あの日」

西中学校 2年 草野 ひなた

8月9日。11時2分。長崎の空は閃光で包まれる。そのとたん、辺りの建物はたおれそれらのしたじきになる人々、うめき声、泣き叫ぶ声、3,000度から4,000度もの熱。まさに地獄のようなおそろしい「あの日」。何万人もの尊い命を今もなおうばっているできごと。

私は8月3日から5日の間に、戦争の悲惨さを学びました。

1日目の平和出前講座の田川さんから、長崎に落とされた原子爆弾、「ファットマン」の威力について教えて頂きました。その威力は、死者約73,900人、負傷者74,900人、建物は全焼全壊12,900棟もの被害を出したとのこと。爆風は時速1,080kmで、50tのものを動かすほどの威力であり、熱は3,000度を超えたそうです。また放射線によって、1km以内にいた人は100%亡くなってしまうそうです。放射線をあびながらも生きのびた人には後遺症が残ってしまい、その症状として、脾臓が肥大してしまったり、数年、数十年たってから白血病やがんによって、健康に影響をおよぼす可能性を高めるおそれがあることが知られています。しかし、放射線が長い期間をかけて引き起こす影響については、まだ十分にわかっておらず、現在も研究が続けられているそうです。2日目、追悼平和祈念館での、被爆体験講話では、長年戦争のおそろしさを語り継いでいる丸田和男さんに当時の状況をお話し頂きました。丸田さんは中学生のときに被爆を体験し、たおれた家の下じきになりながらももがき、がれきの中から抜け出したそうです。一面焼け野原の地には、黒く焼けこげた死体がそこらじゅうにころがっていて、その様子はまるで目を覆いたくなるような情景だったとのことでした。同級生や思い出の校舎は原爆により全く消えていて、先生10名、生徒40名は校舎と運命をともにし、当時の生徒300名のうち114名は校舎にもどってこなかったそうです。原爆の被害にあった子どもたちの命、希望、将来、思い出の場さえ一瞬にして黒くぬりつぶされてしまったことになります。

多くの死者、負傷者を出したあの日、救護所で一人でも救おうと救助に力を尽くす看護師のみなさんもいました。けれども治療しても治療しても次々と亡くなっていく被爆者。どれだけがんばっても救えない命。救護所の方々は二度とあのような無惨な姿は見たくない、と思うばかりだったそうです。

人類は何と愚かなのでしょうか。写真や絵を見ただけで被爆を体験していない私も、周りの大切な人が亡くなったり、思い出のまちが消えてしまうさみしさを感じました。1日目の平和出前講座、救護所メモリアル、2日目の原爆資料館などを通し、環境により生きるか死ぬかの運命が決まるのは、とても残酷だと思いました。

まだまだ核兵器の残る世の中、現在どれだけ残っているのかというと、世界には今年6月時点で12,720発も残っているそうです。このことから、日本の2つの地に原爆が落とされたのは、全て「終わった」のではなく、核を保有してしまう「はじまり」となってしまったのではないのでしょうか。「ヒバクシャ」が年々少なくなっている現実ですが、唯一の被爆国として他国に主張すべきことは何でしょうか。一方で日本は完全に核兵器にたよらないというわけではなく、他国からの侵攻に対し同盟国のアメリカなどの核兵器にたよっている、核の傘の国という立場にあります。これではまた戦争が起きてしまう可能性はそう低くはないと思いますし、被爆を体験している人々にとっては不安で仕方ないと思います。

核に対しまだ課題がある中で、こうして現地へ訪問できたことに誇りをもち、まずは身近な人から少しでも多くの人に過去を知ってもらい、新しい未来についてどうしていくべきか考えられる人を増やしたいと思います。

目・耳・心で感じた事

公津の杜中学校 2年 島田 真帆

私は、長崎に行き、実際に、原爆での被害を、目で見たり、耳で聞いたり、心で感じたりした。学校で習ったこと、研修で知ったこと、テレビで見たことよりも、想像をはるかに超えたものが長崎にあった。

1日目に、長崎大学環境科学部の田川さんの、平和出前講座を聞いた。その中でも、このような言葉が今でも心に残っている。

「大切なものを思いうかべてみてください。それは、77年前の人々にもありました。ですが、そんな人々の上に原爆は落とされました。」

私はこの言葉を聞いて、家族のことを思いうかべ、もし今原爆が落とされたら、日常生活がうばわれ、家族とも会えなくなり、絶望で何もできないと思った。それと同時に、被爆された方も、そう思っていたと思い知らされ、心が痛くなった。

次に、救護所メモリアルで、被爆された方たちの証言を見た。私は、「その人たちはいずれも海軍志願兵で14、5才の中学生の子供たちであった。患者の世話をし、死後の処理も

していた。」という証言に目を疑った。私と同じくらいの中学生在が、そのようなことを行っていることに驚いた。そして、中学生が働くぐらい、たくさんの人が戦争のために働いていると考え、鳥肌が立ち、怖くなった。

鳥居も見た。左半分が吹き飛ばされていた。門柱も、かたむいていた。私は、原爆にそれほどの力があると知り、改めて恐ろしさを感じた。

2 日目、被爆された丸田さんの話を聞いた。13 歳で被爆されたそう。私と同じ歳だ、と思い、少し話が聞きやすくなった。丸田さんは、学校でテストを受け、家に帰った時、被爆したそう。その時の様子を、こう語っていた。

「帰った時、B29 の爆音が聞こえたが、通りすぎるだろうと思っていた。しかし、急降下の音が聞こえ、光がピカッとなって、爆風がきた。命の終わりがやってきたと思った。」

私は、それを聞いて、息が詰まりそうで、想像する度に、恐ろしくなった。その後、丸田さんは、気づいたら倒れた家の下じきになっていたが、やっとの思いで逃げ、逃げた先には、大やけどをした人、泣き叫ぶ悲鳴が聞こえ、地獄のような情景だったそう。そして、丸田さんは、母の死を聞いても、周りが地獄のようで、悲しく思う暇もなかったそう。私は、その地獄のような情景が、どれだけ悲惨だったかと感じ、自分の体が震えるくらいだった。また、丸田さんは、その後、放射線の影響でガンになり、今でも定期的に受診しているそう。そして、また再発してしまうかと毎日心配して生きていると語っていたことが忘れられない。

私は、丸田さんのように、被爆した方が、原爆の影響で、77 年後の今でも、心配しながら、苦しみながら生きていることを初めて知った。そのような悲惨な事も知らず、今が平和だと思っていた前の私。ささいなことでも運が悪いなと思っていた前の私。安心して毎日を過ごしていた前の私。長崎を訪問した後の今、思うと、前の私は狭くて浅い人間だったのだなと感じた。

私は、長崎訪問で、平和とは、誰も苦しむことが無い、核兵器のない毎日を安心して過ごせる世界だと感じた。核保有国は、9 か国もあり、世界では、たくさん核実験をしているそう。そして、広島や長崎以外にも、核実験などによる被害に苦しんでいる人が世界にいる事実を知った。

そして、そのような核兵器をなくし、平和な日が来るには、他の人の「事」に耳をかたむけることが大切だと思う。核兵器で苦しんでいる方の声を聞き、相手にどんな思いがあるのかを理解すると、自分の考えも変わっていくと思う。

私は、目、耳、心をとぎすまし、全体で感じる事ができた。目で原爆の恐ろしさを示すものを見た。耳で実際に被爆された丸田さんや、田川さん、平和案内人の方の話を聞いた。心で原爆を体験した方々の思いを感じた。

私は、長崎で感じた事を、くわしく伝え、より多くの人に知ってもらいたい。そして、それが、平和について考えるきっかけになってほしい。

平和を願って

下総みどり学園 8年 櫻井 希羽

8月9日、私たちは決してこの日にあったことを忘れてはいけなと、長崎を訪問して強く思いました。

77年前、長崎の町へ原爆が投下されました。原子爆弾の熱線や爆風、放射線により多くの尊い命が一瞬にして奪われました。今この世界ではとても想像し難いことですが、現地で当時の写真や資料をみて、その悲しい事実が実際にあったのだと実感し、とても心が痛みました。戦争は、なんの罪もない何千何万人もの人が被害に遭い、命を落とし、体だけでなく心にも大きな傷を負わせました。しかし、世界では今でも、「ヒバクシャ」がおり、核兵器もあります。今の日本は平和ですが、いつどのタイミングでその当たり前の毎日が崩れるか分かりません。いくら日本が戦争を起こさないと言っても、兵器は兵器であり、人を傷つける物です。核兵器なんてものがある限り、いつ原爆が落とされるかも分からない恐怖に襲われ、本当の平和は訪れないのではないのでしょうか。日本が兵器などを持っている理由は国や国民を守るためです。核のない世界と謳っていても世界にはまだ核兵器を持っている国がいます。どの国も国を守るために核や兵器、軍隊を保有しているのだったらなぜ争いが起こるのでしょうか。私は守るために核兵器に頼るのは間違っていると思います。どの国も持っていなければ核で戦うことも傷つく人もいなくなると考えます。核なき世界を作るためにも核兵器を持っている国と持っていない国の差を無くすることが大事なのではないのでしょうか。そしてこのような認識が世界共通になることを心から願います。

そして今、世界ではロシアとウクライナが戦争を起こしています。戦争を起こしても何もないことなどないというのに、なぜ人々は争うのでしょうか。私は被爆体験をした人のお話を聞いて、戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさ、その辛く悲しい体験にすごくショックを受けました。戦争が起こる理由として挙げられるのは国家の保身のため、民族、宗教、考え方、価値観の違いなどがあります。しかし、理由はどうであれ起こしていい理由にはなりません。みんな好きでやっている訳ではないと思うけど、戦争がなくならないのは戦争の怖さを実感できる機会が少ないからなのかなと思いました。正直私は、授業で学んだり、教科書で見た時には、してはいけないとは思いましたが、あまり関心をもつことはありませんでした。けれど今回の経験を通して争いが二度と起こらない平和がこれからも続くことを強く願いました。実際に現地に行って、目で見て、耳で聞くという、すごく貴重な体験ができ、戦争に対する考え方や核に対しての捉え方などがガラッと変わりました。だからこそ私は、長崎で学んだ事実を多くの人に伝えないといけないと思いました。そして戦争だけは何が何でも反対していかないとはいけません。これらは中学生折り鶴平和使節団の一人として、そしてこれからを生きる若者として守っていかなければいけない最後の課題で義務だと私は思います。

語り継ごう「原子爆弾」

成田高等学校附属中学校 2年 遠山 結菜

「平和とは何か。」私は考えたことはありませんでした。8月3日から私たちは、「平和」を探しに長崎へ向かいました。

1日目は、田川さんにお話を聞きました。原子爆弾が落とされた77年前の事をなぜ学ぶべきなのか、なぜ知るべきなのか、とても考えさせられるお話でした。まだ世界には、1万発以上の核兵器が残っていること、さらに原子爆弾が広島と長崎に落とされたのは終わりではなく、核実験の始まりになったことも知りました。今でも核兵器をより強くするために、繰り返し何度も何度も核実験が行われています。核の被害に苦しんでいる人々、「ヒバクシャ」と呼ばれる人が世界には沢山いることも知り、心がとても苦しくなりました。田川さんの話を聞いて一番驚いたことは、日本が「核の傘の国」だったことです。核の傘の国というのは、同盟国の核兵器に頼っている国のことです。私は、日本は核の傘の国でアメリカという大きな傘の中に入っていることにショックを受けました。

2日目は、実際に被爆された丸田和男さんのお話でした。長崎に原子爆弾が落とされたその日、何があったか、目の前はどんな状況だったのかとても興味がありました。しかし、お話を聞くにつれ興味がとても強い恐怖に変わり、胸が締め付けられました。丸田さんは、中学1年生13歳の時に、被爆しました。その日、爆心地から1.3km離れた家で、上半身裸で汗を拭いていると、原子爆弾のピカドンの洗礼を受けたそうです。その後、一度は家が崩れ、がれきの下敷きになってしまいましたが、力をふりしぼって逃げ、その先には泣き叫ぶ人、息絶えた人、助けを呼ぶ人と、この世の地獄だったそうです。丸田さんは、その後、お母さんが亡くなったと聞いても、悲しいとも思わず、見に行く気力もなかったそうです。大切な人が亡くなっても悲しいとも思えなくなってしまうほど恐ろしく悲惨な状況に、もし自分もなったらと考えると、とても怖くて怖くてたまらなくなりました。

私は、田川さんと丸田さんに共通する点を見つけました。それは、2人とも原子爆弾の恐ろしさや平和の大切さを伝えようとしていることです。田川さんは、小学生などにも原子爆弾の恐ろしさを伝えています。丸田さんは、実際に戦争を体験していない私たちに、平和の大切さを教えてくれました。

たった一発の原子爆弾で、77年前の人々は「平和」や「大切なもの」全てを一瞬で失いました。そんな、悲惨な出来事を繰り返さないために、戦争は絶対にしてはいけないと強く思いました。そのためには、私たちに何ができるのか考えました。それは、平和の大切さや戦争の恐ろしさなどを語り継ぐことです。また、核兵器をこの世界から減らしていくことです。私にとっての「平和」は、誰もが笑顔で楽しく毎日を過ごしていくことだと思います。

私は、みんなが笑顔でいられる平和な世界を守り続けたいと強く思いました。

平 和 宣 言

核兵器廃絶を目指す原水爆禁止世界大会が初めて長崎で開かれたのは1956年。このまちに15万人もの死傷者をもたらした原子爆弾の投下から11年後のことです。

被爆者の渡辺千恵子さんが会場に入ると、カメラマンたちが一斉にフラッシュを焚きました。学徒動員先の工場で16歳の時に被爆し、崩れ落ちた鉄骨の下敷きになって以来、下半身不随の渡辺さんがお母さんに抱きかかえられて入ってきたからです。すると、会場から「写真に撮るのはやめろ！」「見世物じゃないぞ！」という声が発せられ、その場は騒然となりました。

その後、演壇に上がった渡辺さんは、澄んだ声でこう言いました。

「世界の皆さん、どうぞ私を写してください。そして、二度と私をつくらないでください」。

核保有国のリーダーの皆さん。この言葉に込められた魂の叫びが聴こえますか。「どんなことがあっても、核兵器を使ってはならない！」と全身全霊で訴える叫びが。

今年1月、アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国の核保有5か国首脳は「核戦争に勝者はいない。決して戦ってはならない」という共同声明を世界に発信しました。しかし、その翌月にはロシアがウクライナに侵攻。核兵器による威嚇を行い、世界に戦慄を走らせました。

この出来事は、核兵器の使用が“杞憂”ではなく“今ここにある危機”であることを世界に示しました。世界に核兵器がある限り、人間の誤った判断や、機械の誤作動、テロ行為などによって核兵器が使われてしまうリスクに、私たち人類は常に直面しているという現実を突き付けたのです。

核兵器によって国を守ろうという考え方の下で、核兵器に依存する国が増え、世界はますます危険になっています。持っていて使われることはないだろうというのは、幻想であり期待に過ぎません。「存在する限りは使われる」。核兵器をなくすことが、地球と人類の未来を守るための唯一の現実的な道だということを、今こそ私たちは認識しなければなりません。

今年、核兵器をなくすための2つの重要な会議が続きます。

6月にウィーンで開かれた核兵器禁止条約の第1回締約国会議では、条約に反対の立場のオブザーバー国も含めた率直で冷静な議論が行われ、核兵器のない世界実現への強い意志を示すウィーン宣言と具体的な行動計画が採択されました。また、核兵器禁止条約と核不拡散条約（NPT）は互いに補完するものと明確に再確認されました。

そして今、ニューヨークの国連本部では、NPT再検討会議が開かれています。この50年余り、NPTは、核兵器を持つ国が増えることを防ぎ、核軍縮を進める条

約として、大きな期待と役割を担ってきました。しかし条約や会議で決めたことが実行されず、NPT体制そのものへの信頼が大きく揺らいでいます。

核保有国はこの条約によって特別な責任を負っています。ウクライナを巡る対立を乗り越えて、NPTの中で約束してきたことを再確認し、核軍縮の具体的プロセスを示すことを求めます。

日本政府と国会議員に訴えます。

「戦争をしない」と決意した憲法を持つ国として、国際社会の中で、平時からの平和外交を展開するリーダーシップを発揮してください。

非核三原則を持つ国として、「核共有」など核への依存を強める方向ではなく、「北東アジア非核兵器地帯」構想のように核に頼らない方向へ進む議論をこそ、先導してください。

そして唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約に署名、批准し、核兵器のない世界を実現する推進力となることを求めます。

世界の皆さん。戦争の現実がテレビやソーシャルメディアを通じて、毎日、目に耳に入ってきます。戦火の下で、多くの人の日常が、いのちが奪われています。広島で、長崎で原子爆弾が使われたのも、戦争があったからでした。戦争はいつも私たち市民社会に暮らす人間を苦しめます。だからこそ、私たち自らが「戦争はダメだ」と声を上げることが大事です。

私たちの市民社会は、戦争の温床にも、平和の礎にもなり得ます。不信感を広め、恐怖心をあおり、暴力で解決しようとする“戦争の文化”ではなく、信頼を広め、他者を尊重し、話し合いで解決しようとする“平和の文化”を、市民社会の中にあたゆむことなく根づかせていきましょう。高校生平和大使たちの合言葉「微力だけど無力じゃない」を、平和を求める私たち一人ひとりの合言葉にしていきましょう。

長崎は、若い世代とも力を合わせて、“平和の文化”を育む活動に挑戦していきます。

被爆者の平均年齢は84歳を超えました。日本政府には、被爆者援護のさらなる充実と被爆体験者の救済を急ぐよう求めます。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を表します。

長崎は広島、沖縄、そして放射能の被害を受けた福島とつながり、平和を築く力になろうとする世界の人々との連帯を広げながら、「長崎を最後の被爆地に」の思いのもと、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2022年（令和4年）8月9日
長崎市長 田上 富久

○平和都市宣言

世界連邦平和都市宣言

（昭和 33 年 10 月 31 日宣言）

成田市は、宗教観光都市として、世界連邦建設の趣旨に賛同し、自ら永遠の平和都市となることを決意し、全世界の恒久平和確立と人類の福祉増進に努力せんとするものである。

右宣言する。

非核平和都市宣言

（平成 7 年 2 月 21 日宣言）

世界の恒久平和は、全世界の人々の共通の願いである。
我が国は世界で唯一の核被爆国として、広島・長崎に原爆が投下されて本年で 50 年目を迎える。

我々は、被爆者の苦しみを全世界の人々に訴え、再びこの地球上にあの惨禍を繰り返すことのないよう強く望むものである。

このため、平和を希求する我々成田市民は、我が国の国是である非核三原則が完全実施されることを願い、全世界の人々と共に、核兵器の廃絶、恒久平和確立のためここに「非核平和都市」を宣言する。



「平和と繁栄の像」

世界連邦平和都市宣言の記念として昭和 33 年の旧庁舎完成時に寄贈された。



「成田市平和のためのメンヒル」

平和を愛する成田市民の心の象徴として平成元年に建立された。

令和4年度

成田市中学生折り鶴平和使節団派遣事業
長崎訪問報告書

令和4年12月 発行

発 行 成田市

〒286-8585

成田市花崎町760番地

電 話 0476-22-1111（大代表）

編 集 成田市シティプロモーション部文化国際課

登録番号 成文 22-032